文窓

ふみのまど・fumi no mado

神戸大学文学部 同窓会 文窓会
事務局：〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1
https://www.bunsokai.com/
連絡用メール：bunsokai_renraku_toiawase@yahoo.co.jp
文学部：☎(078) 803-5595　FAX　078-803-5589
http://www.lit.kobe-u.ac.jp

19号
2021.9.30

（撮影：中畑寛之教授）

新型コロナウイルス感染症で被害に遭われた全国の同窓生の皆様に心よりお見舞い申し上げます。また、感染拡大防止にご尽力されている皆様には深く感謝申し上げます。

特集 / パンデミック
新型コロナ禍での学びと学んだこと

新学部長ごあいさつ

人文学研究科長・文学部長
文窓会名誉会長
長坂　一郎

この度、人文学研究科長・文学部長を務めることになりました。専門は芸術学、その中でもデザインの研究をしています。私はもともと大学で建築を学び、設計事務所での実務経験を経て大学にもどり、巡り巡って文学部に採用され現在に至っています。これまでも多様な経歴の方が人文学研究科長・文学部長を務めてこられましたが、工学部出身は私が初めてではないかと思います。そうはいっても、建築は欧米では工学と芸術学の中間領域に位置しており、歴史学や芸術学・美術史の研究対象でもありますので、建築を学んだ者が文学部長を務めることはとくに変わったことではないのかもしれません。

新型コロナウイルスの流行が始まってから1年以上経ちましたが、まだ流行が収まったとは到底いえません。この原稿を書いている7月時点では授業の多くはオンラインで開講されており、本来ならたくさんの出会いが待っていたはずのキャンパスに気軽に学生のみなさんが訪れることができない状況が続いています。今年こそは対面で開催しようと時期を6月末まで延期していただいた文窓会主催の新入生歓迎茶話会もオンライン開催となってしまいました。

そうした中、神戸大学でも希望者に対するワクチン接種が始まりました。後期の授業が始まる前には多くの学生・教職員が二回の接種を完了できるだろうと言われています。まだまだ予断を許さない状況が続きますが、後期には、少なくとも現在よりは制限が緩和され、多くの授業が対面に戻るものと期待されています。当分の間はマスクを外して授業をすることは難しそうですが、それでも、同じ空間で人文学を共に学ぶ環境を徐々に取り戻していけるものと考えています。

文窓会の皆様には、日頃からご支援を賜り、大変感謝しております。こうした厳しい状況の中ですが、これからも学生たちに温かいご支援やご協力をいただけますよう、心よりお願い申し上げます。

2021年の文窓会総会は初のZOOM開催

文窓会会長
武藤　美也子

会員の皆様、お変わりございませんか。去年の今頃は一年後にはきっとコロナを克服して通常の日常が帰ってきていると思っていました。何の事は無い第4回目の緊急事態宣言が東京・沖縄に発令され、それにも関わらずオリンピックは開催される。国民として割り切れない思いの日常です。文窓会も去年の3月から役員会を対面では開くことができず、オンラインでのやり取りで活動を続けています。

今年度も文窓会主催の卒業祝賀パーティはなく、去年と同様に図書カードを贈りました。でも入学式は出席者を限定してではありますがワールド記念ホールで行われました。去年入学式中止の現2年生の入学式も午後から挙行されました。1年遅れの入学式でしたが、多くの2年生の出席がありました。長い受験勉強の末の合格ですから、やはり入学式は特別な意味があるのですね。

オリエンテーションは中止でしたが、学部ガイダンスは対面で行われ、そこで文窓会の紹介ができました。去年の入学生とは1度も会えていないので、久々の対面紹介でした。同じ場に居るということは、オンラインにはない熱を感じることができました。しかしすぐに第3回緊急事態宣言で遠隔授業に切り替えられ、今年も新入生歓迎茶話会はZOOM開催になりました。

今回は留学生と日本人学生との交流を促進するために、教員の方が企画して毎月行っているインターナショナルアワーに参加させてもらいました。

毎回テーマを決めそれについて留学生と日本人学生が発表し、その後ディスカッションをします。6月の留学生スピーカーはなんとKOJSP（神戸オックスフォード日本学プログラム）の学生でした。KOJSPの学生は去年から日本へ入ることができず、もちろん神戸大学で神大生と一緒に学ぶこともできていません。ですからオックスフォードからのZOOM参加だったのです。スピーチもディスカッションもなんの違和感もなく行われました。ZOOMは時間と空間を超えて我々を結びつけてくれるのだということを、身を以て知ることができた貴重な体験でした。

今年の学部HCDもオンライン開催に決定しました。もちろん文窓会の総会もオンライン開催です。我々役員は年齢からいって、なかなかオンラインでの交流にはついて行きづらいところがあります。そこで教員の方に頼んでZOOM練習会を開いてもらうことにしました。

これからの社会はオンラインと、対面とのハイブリッドなものになっていくでしょう。皆様も日常でZOOM等を使う機会が増えていると思います。今年の学部HCDはZOOM開催です。オンラインですから神戸からは遠く離れてしまった方々にも参加してもらえます。是非思い切ってHCDに参加して下さい。参加方法はこの会報「文窓」の裏表紙のところに詳しく案内しております。事前に練習会も行います。ZOOMデビューをして下さい。画面で皆様にお会いできることを大変楽しみにしております。

くれぐれもお体に気をつけて、10月にはオンラインでお目にかかりましょう。

神戸大学文学部生の人間力・文学力・未来を応援する

第15回 文窓賞 2021年

学生レポートコンクール結果発表

新型コロナ・ウィルスは姿を変えながら感染を拡げ続けています。そんな中、学生レポートコンクールの案内も十分でなかったかもしれません。今年度の応募は残念ながら2作品でした。審査委員会により、それぞれ佳作と新人賞に選ばれました。

佳　作（賞金1万円）

「『見る』ということ」　米谷 美紗（国文学専修2年）

作者は、大学生になった今、ずっと苦手だった書道に取り組んでいる。コロナ禍の授業はオンラインで、やり始めると筆の持ち方から分からないことばかりだ。考えに考え、試行錯誤を繰り返している間に気づいた。「文字を書こう、作品を完成させよう」が頭にあり、「見る」ことが足りていなかったと。

具体的な描写がなされ、分かりやすい文章で綴られている。

「よく見る」には、書道に限らず、深い意味が含まれていると私は思う。知識に裏打ちされ、理解し判断する力、感じる力を磨いて、初めてよく見ることができる。遠隔授業で得た気づきを大切にしてほしい。

新人賞（賞金1万円）

『斧』　村上陽向（1年）

興味を持たせる書き出しだ。カフカの言葉「本とは我々の内なる凍った海に対する斧でなくてはならない」から引用された斧。コロナのため、求めていた様々なものとの出会いの機会が閉ざされている。しかし、作者は前のめりで、斧を待っている。何かは分からないが、多くのものとの出会いを待っている。

パンデミックの中で模索する新入生の心情がよく表れている。少し回りくどい文章を整理し、ラストを再検討すると、よりインパクトのある作品になると考える。

コロナが収まり、多くと出会い、振り下ろされる「斧」を見つけた時、是非続きを書いて欲しい。

選考を終えて

コロナ禍、対面で授業が受けられず、仲間と話し合う機会も奪われている。地球環境が変化し続け、今後も、大災害等さまざまな不測の事態が起こると考えられる。今回のパンデミックは、厳しい状況下、何を考え、どう生きるかが問われている気がする。

今回の作者たちは、そうした状況の中で自分を見つめ、悩み、試行錯誤し、行動している。それは後の人生の大きな糧になると思われる。『書いたものは残る』（島京子著）というエッセイがある。文章にすることで、後々いろんな年代の自分に出会い、新しい発見がある。　（文責　審査委員長　西川京子）

選考委員
長坂一郎研究科長（心理学　教授）　樋口大祐副研究科長（国文学　教授）　白鳥義彦副研究科長（社会学　教授）
武藤美也子　三宅征彦　田中賢司　廣野幸夫　吉田浩次　中畑寛之　津田薫　西川京子

あなたのチカラ、お貸しください！

文学部の同窓会「文窓会」に少しでも興味をお持ちの方、お手伝いいただけるコトがいろいろあります。一緒に、同窓会活動を盛り上げませんか。

文窓会の「連絡 - 問合せ用アドレス」にメールでご連絡ください。お待ちしています！

（お名前　卒業年月日　連絡方法をご記入ください）

bunsokai_renraku_toiawase@yahoo.co.jp

※この記号（アンダーバー）は、【shift】キーと【ろ】キーを同時に押してください。

特 集

パンデミック 新型コロナ禍での学びと学んだこと

令和2年度新入生歓迎茶話会をオンラインで開催

増記　隆介*（日本美術史 准教授）

令和2年7月8日（水）15時45分から、新入生歓迎茶話会をオンラインで開催しました。

文学部では、毎年文窓会の皆様のご尽力により、飲み物、お茶菓子、軽食などをご用意いただき、新入生が学生生活や今後の進路について各専修の教員や大学院生を含めた在学生と懇談する茶話会を文学部A棟の学生ホールとラウンジで開催しています。

例えば、

「○○に興味があるけれど、どんな学問なんだろう？」

「○○研究室は、どんな雰囲気なんだろう？」

「専修に進むためには、どんな講義を受けておけば良いのだろう？」

「サークルやバイトはどのような感じなのだろう？」

「大学院はどんなことをするのだろう？」など

今後の文学部における学びや生活に関する様々な不安や疑問に各教員や二年生以上の学生・大学院生たちが答える場です。

令和2年は、世界を席巻したコロナウィルスの影響によりこのような機会を持てずに、そもそも大学に通学することもできずに、夏を迎えてしまいました。まだまだ先行きも不安な状況でしたが、その不安要素の一つ、文学部での学びの具体的な姿について、少しでも理解を深め、不安を解消する一助となるよう、文窓会の皆さん、文学部教職員により、ZOOMによるオンライン開催ではありましたが、例年と同じ茶話会を催すことができました。当日のプログラムは以下の通りです。

第一部　15:45～　文窓会による歓迎セレモニー

1、挨拶　文学部長挨拶　奥村学部長
　文窓会長挨拶　武藤会長

2、文窓会役員・文学部教員紹介

3、文窓賞募集案内　武藤会長

セレモニー終了後～17:45

4、学生生活や履修方法の質問コーナー
　教務委員・教務係

第二部　16:15～　各専修・留学生担当による説明

第一部は、歓迎セレモニーとして文学部全体を代表し、文学部長の奥村先生、文窓会長の武藤美也子様から文学部や同窓会についてお話しいただきました。また、「文を学ぶ」学舎である文学部の学生たちに早くから文章によって何かを表現する喜び、難しさを知ってもらうため、毎年、文窓会の主催で行われているレポートコンテストである「文窓賞」について積極的な応募を期待されている旨のお話がありました。

第二部では、オンラインで各専修に分かれ、新入生が興味のある専修を訪問し、それぞれの教員や学生と対話する場としました。例年と同じようにオンラインでも複数の専修を訪問することを学生に勧めました。そうすることで文学部の多様な学びの一端を体験し、二年生以降の進路について考えるきっかけとなることが期待されています。

第二部では、あわせて、単位の取得方法や学生生活全般の不安や疑問について、教務委員の茶谷先生、菊地先生と教務係の皆さんが中心となって相談を受ける場を設け、また留学に興味がある新入生に、その方法や留学によってどのようなことが学べるのか、留学生担当の齋藤先生、南先生による留学相談の場も設けていただきました。

新入生の大部分が参加し、久しぶりの文学部全体の行事としても、新入生にとってはガイダンス以降初めての同級生が集う場としても有意義、かつ楽しい時間が過ごせたのではないでしょうか。教職員にとっても、新入生と身近に会話のできるとても充実した時間となりました。また、オンライン開催であったことは、逆に文学部の学舎でみんなが揃って実際に学びたいという気持ちを高めてくれたようにも思います。

この場を借りまして、開催にご尽力いただいた文窓会の皆様、各専修の先生方、職員の皆様に篤く御礼を申し上げます。　（2020年度文学部学生委員）

＊増記先生は2021年度より東京大学大学院 人文社会系研究科に移籍されました。

ホームカミングデイ

中　真生（哲学・倫理学 教授）

昨年度のホームカミングデイは、異例尽くしの開催となりました。まず、はじめての試みとなるオンラインで行われたことに加え、参加対象者も2019年度卒業生・修了生に限定させていただきました。これには下記のような事情があります。2019年度末にコロナウイルスの感染が拡大したため、卒業式後に毎年、LANSBOXで開催されている、文窓会主催の卒業懇親会の開催が見送られることとなりました。当時の奥村弘研究科長をはじめ、文学部の先生方がそのことを大変残念に思い、翌年度のホームカミングデイの折に、2019年度の卒業生・修了生に声をかけ、同級生や専修の先生方と改めて語らえる場を設けたいと考えていました。しかしコロナウイルスの影響は、思いのほか長引き、ホームカミングデイ開催時期が迫っても収まることはありませんでした。そのため、例年開催されているような、神戸大学全体での式典のあとに文学部で、学部内のホームカミングデイを開催することはかなわなくなりました。そこで、全学のホームカミングデイとは数週間ほど時期をずらして、11月21日（土）に、2019年度卒業生・修了生のみを対象とするホームカミングデイを、zoomで開催することが計画され、メールや手紙でご案内を致しました。

連休中の開催で、また卒業・修了から半年以上経っていたこともあり、どれだけの卒業生・修了生が参加してくれるのか不安もありましたが、平均して各専修数名の卒業生・修了生が参加してくださり、休日の午後、皆で和やかなひとときをもつことができました。

第一部の全体会では、まず研究科長の奥村弘先生、続いて文窓会会長の武藤美也子さんのお話をいただきました。次に、哲学専修3年生の成富ちひろさんによるスライドショーがありました。コロナウイルス対策で一変した大学の近況を紹介するもので、図書館や教室にアクリル板が立てられ、消毒液がおかれた様子を写真とともに紹介してくれたり、一定の制限の中、クラブやサークル活動を、オンラインも活用しながらそれぞれ工夫して行っている様子などを分かりやすく紹介してくれました。そしてさいごに、参加してくださった専修の先生ひとりひとりのお話がありました。コロナウイルスの感染対策で様変わりした教育やご自身の研究状況を話してくださったり、半年間で生じた専修の変化を報告されたりと、例年の卒業懇親会のときよりも多くの先生方の、真面目なお話をじっくりと聞くことができたのは、オンライン開催ならではのよさでした。

第二部では各専修の先生が設けたズームへとそれぞれが移動して、専修ごとの歓談が行われました。専修の先生方や同級生とじかにお話しできる第二部を目当てに、第二部から参加した卒業生・修了生も少なくなかったようです。専修に分かれた後は、第一部と打って変わってざっくばらんな雰囲気となり、それぞれの卒業生・修了生が順番に近況を話したり、職場のコロナウイルスの影響や対策を共有し合ったりと、卒業・修了から半年を経たこのときだからこその情報交換や経験の共有ができたように見受けられます。新しい生活の中で格闘し、しかもコロナ対策によるストレスやコミュニケーション不足も生じやすい状況下に、懐かしい同級生や専修の先生方と画面越しに顔を合わせ、お互いに励まし、笑い合う、リラックスできるひとときになったのではないでしょうか。ささやかではありますが、再び新しい環境の中で戦っていくための元気を得る機会になっていたら幸いに思います。

一緒にお酒が飲めない、食事を楽しめないなど、オンライン開催でのもどかしさもあったと推測しますが、逆に、オンラインだからこそ、遠方の卒業生・修了生も参加することができ、また途中の入退室も自由だったため、気軽に顔を出すことができる利点もあったかと思います。開催にご協力いただき、当日の第一部にもご参加いただきました文窓会のみなさまには心より感謝申し上げます。また今回は、冒頭に既述した事情により2019年度卒業生・修了生のみを対象とさせていただいたため、同窓生や専修の先生方とお話しする機会をもてなかったほかの同窓生の皆様にはお詫び申し上げます。今後も、例年と異なる状況が続く可能性がありますが、同窓生の皆様には変わらぬご支援、ご協力をいただければ幸いです。

（2020年度文学部学生委員）

パンデミックの一年と、学生のみなさんへの賛辞

茶谷　直人（古代ギリシャ哲学・生命倫理学 教授）

私は2020年度の教務委員長を務めた。それはちょうど、パンデミックが日本でも発生し、現在に至るまで続くこの疫病社会に大学が振り回された一年間に相当する。そういうわけで、以下では主に教務関係の事柄について一年間を簡単に振り返ってみたいと思う。

緊急事態宣言の発令を受け、大学は4月初頭、すべての授業を当面オンライン化すること、前期の授業開始を5月の大型連休明けとすることを急遽発表した。そしてそれまでの1か月間は「オンライン授業の準備期間」として位置づけられた。大半の教員にとっては、「そんなことを急に言われても困る」という状態の中で手探りの船出だったろう。通信による授業というものは本来、通常の授業とは別のノウハウを必要とするものであり、その筋の専門家集団（通信制大学や民間の通信教育機関）が長年の開発によってようやく形にできるような類のものであるはずだ。それを、LMSはおろか、'Zoom' や 'Webex' といった言葉を聞くのも初耳というのが大半の面々が「とにかく準備してください」と言われたのだから、困ってしまうのは仕方がない。かくして当然ながら教務委員会として一定の指針やマニュアルを提供することが求められた。しかし恥ずかしながら私自身はもともと辻説法的にひたすらのらりくらり喋り続ける授業スタイルゆえ、提供できる知見が自分の引き出しにない。しかし幸運なことに、副教務委員の菊地さんをはじめとして情報通信やコンピュータに詳しい周りの人々に恵まれ、また全学も一定の手引きを提供してくれたので、なんとか対応することができた。とはいえ結局は「最終的には教員各自のやりかたに委ねます」という丸投げ的な言い方になってしまったのは申し訳ないと思っている。にもかかわらずどの先生もそれぞれ工夫して試行錯誤しながら授業スタイルを開発され、サーバダウンなどの散発的なトラブルは色々発生したにせよ一年間乗り切ることができたのは、教務学生係の皆さんを含め周りの様々な方々に助けられたおかげである。とはいえ、やはり「餅は餅屋」的な面は存在すると個人的には思っている。通常授業へと全面的に復旧する日が待ち遠しい。

一方、とにかく一番大変だったろうと思うのはやはり学生の皆さんである。特に新入生。入学式も中止。夏休みに入っても入学して一度も校門を潜れない状況。知り合いも友達もなかなかできない。授業はすべてモニタの画面越し。一人暮らしの学生も多い。サークル活動はおろかカラオケにも食事会にも行けない。本来は授業の合間や放課後のちょっとした雑談から人と人の交流が始まるのに、Zoomから退出すれば残るのはのっぺりした画面。こうした、本来できるはずだった諸々の活動は、一つ一つは些細なもの——偉い方々の言う「不要不急」なもの——かもしれない。しかし、アリストテレスも言うように、人間は本性的に社会的な動物だ。社会的行動を制限されるということは、それがどんなものであれ、「人間らしく生きる」ことを禁じられることに他ならない。だから、学生のみなさんはこの一年間本当に立派だったと感服する。自分自身には健康上の不利益がほとんど生じない疾病にもかかわらず、高齢の人々の不利益を最小化するために、自分の私益と人間らしい生活を制限することを自ら進んで買って出て過ごしてくれたのだから。それなのに大人たちはつい「気の緩んだ連中がノコノコと街に出てふらつき回る」などと若者たちを悪者扱いしようとする。むしろわれわれは、若者たちがこれまで実行してきてくれた利他的なふるまいをもっと讃え、感謝すべきだと思う。ワクチンが全世代に浸透し状況が好転するであろう近い将来、私自身は学生たちと楽しく乾杯したいと思う。

（2020年度文学部教務委員長）

新型コロナウイルス感染症のため中止となった大学行事について

中村　秀幸（人文学研究科 事務課長）

私は、人文学研究科事務課に2019年4月1日付けで異動となった。これまでの30年を超える大学職員としての経歴の中で、一番学生を身近に感じる日々を送ることができていた。特に、4月の新入生のガイダンスや歓迎の茶話会、8月の文学部のオープンキャンパス、さらに文学部で実施している神戸オックスフォード日本学プログラム（KOJSP）による演習発表会と修了式などの行事により、前途ある学生たちの希望に満ちあふれた熱気を感じられたのは、人文学研究科での仕事をする喜びとなった。

大学の行事は、先に述べた学部独自の行事や入学試験など多数あるが、やはり新入生を迎える入学式と学生を送り出す学位記授与式は、最大かつ重要な行事だと思う。1995年1月17日に発生した阪神淡路大震災の発生後でさえも大学は学位授与式及び入学式を行った。

ところが、新型コロナという未知なる感染症の蔓延により2020年3月24日及び3月25日に開催を予定していた令和元年度博士学位記授与式並びに学位記授与式が中止となった。これに併せ、これまで文学部と文学部の同窓会である文窓会で開催してきた謝恩会も行わないこととなった。

このように学生たちを送り出すという節目の行事を行えないもやもやした気持ちの中、学生委員を中心に文学部及び人文学研究科における学位授与の代替行事を企画し、実施することとなった。この企画は、感染症対策のため、卒業生等を一堂に集めることができないことから、15専修毎に先生方から卒業生等に学位記を授与し、交流するというものであった。収録した学部長及び文窓会会長のビデオメッセージを放映し、卒業生の門出に花を添えるものとなった。当日は、着飾った学生たちがキャンパスに集まり、先生方から卒業生等に学位記を授与の後、短い時間ではあったが、懇談を行った。大きなホールで父兄や後輩たちに見送られる盛大な学位授与式ではなく、教室での授与式であったが、最後に学生たちが晴れやかな姿で文学部キャンパスに来てくれたことは、素直にうれしく思った。学位記を郵送で送付する学部もあった中、この行事を企画された先生方に敬意を感じた。

令和2年度入学式は、2020年4月3日（金）に開催される予定であったが、これも中止となった。厳しく辛い大学受験を乗り越えて、新たな生活、新たな仲間との出会いなど期待に夢を膨らませている新入生にとって入学式は、大学生活の第一歩となるものであっただろう。だが、我々は、日々拡大していく新型コロナの感染拡大のため、入学式を中止するという大学の方針はやむを得ないと考えざるを得なかった。その後、2020年4月7日に緊急事態宣言が発出され、兵庫県は県内の大学に5月6日までの間、臨時休業を要請し、大学として授業開始を5月7日とすることが発表された。これにより、新入生にとって重要な行事であるガイダンスの実施が中止され、ホームページでの案内となった。さらに、5月7日から開始される授業は、遠隔授業となり、新入生が大学に登校することが先延ばしとなってしまった。メディアは、学生が大学に登校できず、一人で遠隔授業による多くの課題をこなしていることなど学生の孤立化を取り上げた。この間、文学部の先生方は、入学後一度も大学に登校できていない新入生のことを常々気にかけ、このような状況でも何か繋がることはできないか思案されていた。その結果、学生委員、教務委員を中心にオンラインによる新入生の歓迎茶話会を7月8日に実施することを企画した。この企画では、学部長の挨拶や専修の説明などが行われたが、学生同士が交流できるよう工夫を凝らしたものであり、当日は多くの新入生が参加してくれた。ZOOMやWebexのオンライン会議システムが導入され始めたのは、3か月前の2020年4月頃であるにもかかわらず、授業の実施のみならず、オンラインによる茶話会を実施してしまう先生方を誇りに思った。

この後、先生方は新入生の登校企画を2020年8月24日に計画した。これは、図書館ツアー、文学部ツアー、専修訪問を予定し、新入生に文学部を肌で感じてほしいとの思いからの企画であったが、新型コロナの第2波により8月12日に中止することを決定した。さすがにこの時は、第2波の兆しが6月下旬ごろから見えかけてきたにもかかわらず、新型コロナウイルス感染症の拡大に対する国の対応がとられなかったことを残念に思った。

以上のように2020年は新型コロナのため中止となった大学行事が多数あり、現在も授業をはじめ、これまで通りに行えていないことがたくさんある。これからワクチン接種も進んでいくであろうが、まだまだ予断を許さない状況である。少しでも以前の状態を取り戻せるよう教職員及び学生が一丸となって本気で対応していくしかないと思う。

新型コロナウイルス感染症に苛まれる社会を眇めてみた

河島　真（国史学専攻・1991年卒）

外食できなくても、旅行に行けなくても、もともとそうしたことにそれほど関心のない私は、どうってことはない。ところが世の中には、外で飲み食いしたくて、旅に出かけたくて仕方のない人たちがいる。お店で飲食できなければ缶ビールを片手に路上に集い、県境を越えての移動自粛が呼び掛けられたら、何とかして県内で動き回れる場所を探し出そうとする。緊急事態宣言に辟易しているのは、飲食業界や観光業界ばかりでなく、と言うよりむしろ、そこから提供されるサービスを日常生活の不可欠な部分としている数多のお客たちであることが、少しずつわかってきた。

外食や旅行は、人間にとっておそらく不可欠な娯楽である。あの江戸時代でさえ、少し余裕のある農民や商人たちは俳諧や能楽に親しみ、一生に一度と言われた伊勢参りを楽しみとして日々生活していた。『精選版 日本国語大辞典』（小学館、2001年）には、「娯楽」とは「生活のための労働、仕事や勉学などの余暇に、くつろいでする遊びや楽しみ」とあるが、生活のための労働や、強制される勉強しかなければ、人の心はすさんだものとなり、治安も悪化するであろう。娯楽は、今や個人にとってだけではなく、ナチスの余暇管理政策に見られるように、社会にとって不可欠なものとなっている。

とはいえ、生命の維持と再生産のための衣食住に比べると、優先順位は本来低い。ところが、娯楽が有力な金儲けの手段となるにつれて、優先順位は低いはずの娯楽への欲求が、これでもかと無理矢理かき立てられるようになってきた。緊急事態宣言の中にあっても、テレビは居酒屋チェーンのCMを流し続け、旅をテーマにしたバラエティ番組は相変わらずの人気だ。娯楽への欲求を喚起する国を挙げての一大キャンペーン、いわゆる“Go To”は、娯楽への支出を国家主導で半ば強制する仕掛けにほかならない。そもそも、「観光立国」などという浮き草のような政策を真面目に掲げている我が国のこと。政権にパイプを持つ巨大な観光業者を生き残らせるためには、是が非でも“Go To”を推進しなければならなかったのであろうが、それを利用した国民の数は決して少数ではなかった。

但し、多くは「パッケージされた娯楽」である。ツアー旅行に象徴されるように、人々はバスに押し込まれ、決まったコースを時間通りに巡回し、バス会社がマージンを受け取っているであろう土産物店で買い物をさせられ、満足した気になって家路につく（キャンプでさえも「キャンプ場」で整然と行われるのだ）。某国保守政党の幹事長が首相を呼びつけたような高級店は別として、安いだけが取り柄のような外食産業によって提供されるメニューは、マニュアルに従って工場で生産されたもの。持ち寄りのホームパーティーのような楽しみ方や驚きは、そこにはない。

「パッケージ化された娯楽」の消費を半ば強制され、日々忙しく駆りたてられる現代人。かき立てられた欲求は、もはや制御不能である。かくして悪魔は声高に叫ぶ。結構なことではないか。無駄こそが経済成長の原動力。欲望のままに行動したまえ。その上にこそ、豊かな暮らしが保障されるのだ。環境保護？　エコロジー？　まったく笑止の限り。レジ袋を有料化したところで、水素自動車を普及させたところで、環境への負荷はそれほど変わらない。「地球にやさしい」を標榜する新しい産業が生まれ、儲けるだけのことなのだよ。

この悪魔の叫びに、私たちはどう応答すればよいのだろう。ただひとつ、分かっていることがある。「SDGsは『大衆のアヘンである』」（斎藤幸平『人新世の「資本論」』集英社、2020年）。この言葉が警告しているように、経済の縮小を決断できない人類に未来はないであろうということだ。

（神戸女学院大学 文学部 教授）

ペンで戦う

山根　彩花(英米文学専修・2020年卒)

滋賀県で新聞記者をしている。琵琶湖と比良山系の山々がどこか神戸を思い出させる、美しい場所だ。事件担当として涙をのむことも多いが、湖岸からの風景に癒されている。

大学を卒業してからの日々を振り返ると、世界中の人々がそうだったように、新型コロナウイルスがあらゆる場面に我が物顔で居座っていた。昨年3月、神戸国際展示場での卒業式が中止となり、茫然としている間もなく、文字通り社会に放り出された。もはや金よりも貴重となったマスクの下に不安を押し込めながら、社会人の所作や仕事を覚えていかねばならない。この時期、初めてオンライン飲み会やリモートワークを経験した人も多いのではなかろうか。

私自身も入社して配属先が決まり、知らない土地で上司の指導を受けながら必死に仕事をこなした。多くの人と出会った。法廷では悔悟の涙を浮かべる被告の姿を目の当たりにし、悪へ厳しい視線を向けるベテラン警察官とも知り合った。コロナ禍をうまく渡り歩き、明るいニュースを届けてくれる市井の人々もいた。そういった人たちの話を聞いては、記事という形にして届けるのは純粋な喜びだった。

そうするうち、新聞やテレビには聞き慣れない言葉が次々に躍り出た。「3密」、「ソーシャルディスタンス」、「新しい生活様式」。どこかまぬけな響きを持つこれらの単語は、今や何の違和感もなく使われている。それどころか、我々の行動を規定する権威すら持ってしまったように思う。昔なら私は、その力にただ感動していたに違いない。しかし実際のところ私たちは、この1年以上もの間、それらの言葉が看守を務める牢獄に収監されてきた当事者なのだ。私は模範囚として抵抗を諦め、疑問や怒りを押し殺して従順に従い、次第に何も感じなくなっていった。

言葉の力は往々にして暴力にもなるということを、これほどまでに実感したこともあるまい。人の言葉に傷ついたことは今までにないでもないが(全く傷ついたことのない人なんているのだろうか)、言葉一つで生活が一変したことはなかった。なるほど確かに、感染対策は国民の急務だから、共通認識を持つために単語を生み、広めるのは当然のことだ。ただ、単語に日常を型抜かれたのは初めての経験だったのだ。食品工場の機械が同じ形のクッキーを作っていくように。

私たちは、そんな力を持ちうる言葉の手綱を握った気でいて、その実暴れ馬に振り回されているに過ぎないのだろう。見回してみると、ひどい言葉が世の中に溢れている。デマが、そのデマを心から信じて疑わない人によって広まる。平和の祭典であるはずの五輪が日本を分断し、その開催の是非を巡って、時に耳を疑うほどの雑言が飛び交う。特定の人への誹謗中傷がある。それをすべて無視する。責任の所在が分からないまま、力だけが加えられていく。

「人間は負けるように造られてはいない」。ヘミングウェイが『老人と海』で書いていることだ。でも本当にそうだろうか、と最近思う。我々はこのコロナ禍で、十分すぎるほど負けているではないか？新型コロナそのものが原因なのか、今回露呈しただけなのかは分からない。何に対してなのかも知らない。ただ、負けている。

それでもあのサンチャゴという老漁夫がその台詞を放つと、読者は心から納得してしまう。それは、彼が魚を殺す自身の加害性に自覚的でありながら、それでも全身全霊で闘争することを選んでいるからだ。痛手を負いながらも、戦うことをやめないからだ。漁師にとって大切なことのために。

今私たちには、冷静に自分の言葉の力を自覚しながら、それを上手く駆使し、何とかしてままならない現実と戦い抜くことが必要だ。そうすれば、人間は何にも負けないと言い切れるだろう。私もペンを持ち続ける以上、自分の言葉の責任から逃げずにいたい。その上でやはり克明に書き、暗い世で一筋の光となるようないい仕事がしたいものだ。

パンデミック禍の過ごし方、考えること

田中　勉(国文学専攻・1972年卒)

□コロナ禍の生活と感染予防対策

私の住まいは成田空港に近い水と空気の美味しい落花生で有名な八街市にある。感染者数は少ないが、それでも不安な日々を過ごしている。ワイフとの外食や海外旅行、実家(奈良)への墓参を中止した。日々の感染予防対策として厚生労働省の手引きを参照し、密閉・密集・密接の「3密」回避を徹底している。外出時はマスクの着用、病院や大規模商業施設等では手指衛生に気を付け、東京からの帰宅時には即シャワーと衣類の着替えを励行している。

□健康管理:「運動不足解消とコロナうつ対策」

外出自粛などの長期化に伴い体調に不安を感じていた頃、次の新聞記事が目に留まった。

「外出自粛　筋肉の減少に要注意　転倒・骨折の危険　家にいても運動を」

普段より体を動かさなくなると、1か月でも筋肉量に影響が出ることがある。

まずは脚を鍛えること、スクワットや椅子に座ってひざを曲げ伸ばしする運動を推奨、国立長寿医療センターのホームページでも家の中でできる運動が見られる。

感染予防は大切だが、動かないことによる衰えも非常に危険。

[関西医大YK教授]

「コロナうつ　生活習慣で防ぐ」

コロナ禍で、不安感や不眠、目覚めの悪さなど、うつ病に相当する症状が出る人が増えている。これは脳内物質のセロトニンが十分分泌しなくなっている状態で、セロトニンを増やすため①太陽を浴びる②体を動かす③人やペットと触れ合うことの三つの生活習慣が必要。

[東邦大HA名誉教授 脳科学者 医者]

当該記事を読んですぐ次の取組を始めることにした。

テレビ体操(NHK2CH 10分)と柔軟体操(自分で考案 20分)に加えて、脚力、腕力、握力の強化のため運動器具類も活用して②体を動かし、愛犬との散歩で①太陽を浴びる、③人やペットと触れ合うこともカバーしている。効果として自宅や駅の階段の上り下り、自転車で坂道を上る時のしんどさが軽減されていることから、体力向上や筋肉量の増強には多少役立っていると感じている。

□自宅生活での問題と対策

ワイフと自宅で過ごす時間が増加した。居間で一緒にTVを見ている時など、ちょっとしたことで直ぐ感情的になり、会話がギクシャクし口論となる。対策として、まず、相手への温かい気配り、就中、正しい言葉遣いに充分留意し、併せ、①笑顔、②相手の話をよく聞く、③感謝(ありがとうを多く云う)の3つを実践することにした。効果としてワイフとの正面衝突がかなり減ったように感じている。

□病院で考えたこと:これまでの人生を回想して

コロナ禍で少し時間的余裕ができたので、持病の手術を受けるために一週間程入院した。術後数日を経て幸い経過も良かったので、深夜に目が覚めると病棟五階のラウンジで過ごした。窓越しに一人夜景を眺めながら自らの人生を回想した。初めは数々の楽しかった記憶が蘇ってきた。家庭生活に関しては反省することが多く気が滅入った。高度成長期の自分は過度に自己中心的で頭の中は会社と仕事のことばかり、子育てをワイフに託し家庭を顧みることは殆どなかった。今にして思えば痛恨の極みであるが、他者にも充分配慮のできる心の温かい人間となれるよう日々の精進を自らに誓った。

思い出はインド・ネパールへ飛翔した。仏跡巡礼の旅で九死に一生を得て以降、何時か、再度、現地に出かけ教育支援をしたいと願っている。幼少期にタイムスリップした。ラジオで太平洋戦争の戦記をわくわくして聞いている自分の姿が脳裏に浮ぶ。後年、日本海軍駆逐艦「雷」による英国将兵(422名)の戦闘下での洋上救助の話を知り(YouTube)、工藤俊作艦長の崇高な武士道精神に深い感銘を受けた。

ホノルル駐在では、日系100大隊(後に米国陸軍史上最強の部隊である日系442連隊に合流)の生き残りであった上司の語るモンテカッシーノ(伊)の激戦(連合軍が数か月かけても落せなかった敵要塞を日系部隊が万歳突撃によりわずかな期間で攻略)の話も懐かしく思い出された。今日のハワイ州日系社会の繁栄は、日系100大隊の欧州戦線での功績によるものである。

小学生の頃の無益な殺生が我が心を責め苛む。せめてもの贖罪として生きとし生けるものの幸せを願い、社会福祉と動物愛護活動に今後とも尽力して行きたいと考えている。

以上

パンデミック禍の過ごし方、考えること

中野　裕
文窓会東京支部長（英米文学専攻・1961年卒）

2020年来、「三密」「Stay Home」「Keep Distance」を守り、外出も慎重にしています。

1）2019年末までは、月に一度のカラオケ、月3－4回の麻雀、月2回のゴルフ会、月1回の懇話会（当ハイムの男性による夕食懇話会）、月3回の源氏物語（原文）講読会を続けていましたが、コロナ禍のため、ほとんどの会合が中止となっています。

2）源氏物語の原文講読は、先生（国学院大学教授）のご配慮もあり、2020年になっても、一時期は休講となりましたが、続けています。

2021年5月末に、源氏物語第54帖「夢浮橋」を読み終え、6月より、「桐壺」に戻り、購読を開始しています。（私は、2008年に第35帖の「若葉下巻」から受講していますので、もう13年目になります）

3）その他には、小中高大学・社会人の7つの幹事を引き受けてその会合の実施をしていました。

しかし、2020年に入りコロナ禍の影響を受け、高校関東同期会を除いた全会合を中止し、2021年に順延しています。その通知をそれぞれに出すという作業で、同窓及び関係者の人々との交流がはかれています。

4）日常のこと

◎NHKテレビ　「おちょやん」の「杉咲　花」さんの大阪弁には、感心して、毎日朝と昼の二回見ることが多い。　{だんない} {おはようおかえり} など幼少時に良く聞いた大阪弁が懐かしく。

◎テレビ（スカパー、東京MX、神奈川TVK）では、「よしもと新喜劇」の番組を逃さず視る日々です。ここでもなつかしい大阪弁を心地よく聞いています。

◎今年の阪神タイガースは、快進撃を続けており、テレビ視聴を欠かせない。

◎スポーツクラブ（セントラル）には、日曜日と月曜日を除き、ほとんど毎日通い、筋トレを含め、約2時間過ごすことにしています。

◎5月から月二回のゴルフを始めています。

◎月曜日午前中は、上述の如く、源氏物語の講義を受けています。

◎日常の生活では、この一年間、「禁酒生活」を送っており、正月のお屠蘇以外、一滴もたしなんでいません。これは今後も続行する所存です。

コロナ禍のもと、生活が息苦しいのではないかと良く聞かれますが、外出がままならないこと、友人との邂逅が出来ないことなど不自由には感じますが、文化大革命時（1967年の5月から7月末の中国（広州＆北京）での、友好商社の一員としての長期出張生活時の比ではありません。監視の目がきつい生活ほど苦しいものはないと思っています。

（→p14に続く）

監視の目がきつい生活ほど苦しいものはない
文化大革命時1967年の体験

文窓会の「澤田隆治様（昭和30年卒・国史学専攻）」がご逝去されました。謹んでお知らせ致します。

8月18日の読売新聞夕刊第3ページ「追悼抄」の記事より一部を紹介します。

追　悼　抄

■澤田隆治さん　メディアプロデューサー　5月16日　心不全で死去、88歳

「テレビ界のレジェンド」「お笑い界のドン」「視聴率男」など、異名は数知れず、手がけた番組の内、関西地区で最高視聴率64.8％を記録した「てなもんや三度笠」、漫才ブームの火つけ役となった「花王名人劇場」は、テレビ業界の金字塔だ。

2009年には、文窓会東京支部主催の第6回木曜会で講師を務めていただきました。

①　日時：2009年2月26日　②　場所：東京六甲クラブ
③　演題：笑いと健康　④　参加者：50名

澤田隆治様の安らかなる旅立ちをお祈り致します。

＊中野 裕 文窓会東京支部長より事務局宛に送っていただきました。

ありふれた日常にちょっとしたスパイスを

薄　まなみ（英米文学専修 2年）

突然思い立って、国宝キトラ古墳壁画東壁「青龍」特別公開というのに応募した。キトラ古墳があるのは奈良県高市郡明日香村で、キトラ古墳以外にも日本史の教科書に出てくる遺跡や寺が多く残っている場所である。キトラ古墳に行く前に高松塚古墳を見に行った。高松塚古墳もキトラ古墳と同じく壁画が有名で、高校で日本史を学んだことのある人は教科書や資料集で一度は高松塚古墳の女性群像を見たことがあるのではないだろうか。高松塚古墳そのものは、ただ盛り上がった土に草が生えただけのものである。しかし、そこから発掘された壁画は緻密で、色鮮やかなものであり、教科書に載っているものが実際に存在することを実感できるという感動があった。旅の目的であったキトラ古墳壁画東壁「青龍」は保存環境の関係で1年に1度期間限定でしか見ることができない。壁画というからには壁に直接絵が描かれているのだろうと想像していたのだが、実際は漆喰が塗られその上に絵が描かれている。キトラ古墳発見時にその漆喰がはがれかけており、また盗掘によって土砂が流れ込んでいたことから、壁画のある石室の発掘調査は様々な技術や知識を総動員し迅速に行われたそうだ。多くの人々の知恵と努力のおかげで今日の私たちは、キトラ古墳の壁画を見ることができている。しかし、そもそもキトラ古墳に埋葬されていたのは誰なのか、なぜ「キトラ」古墳という名前なのかなどは分かっていない。

さて、高松塚古墳やキトラ古墳について熱く語ってきたが、私は日本史専修でも美術史専修でもない。英米文学専修である。ちなみに入学当初は東洋史を専修しようと思っていた。日本史や東洋史が好きなのにどうして英米文学を専修しようと思ったのか、友人によく聞かれるのだが、答えは1つ、「突然思い立ったから」である。では、英米文学を勉強していて何が面白いかと聞かれると、まだその答えは見つかっていない。しかし、最近文学部のインターナショナルアワーで知り合ったイギリス人の友人とメッセージのやり取りをしていて、偶然同じアメリカ文学を読んでいて感想を共有できたことが、今の私が英米文学を学ぶモチベーションになっている。

大学生になって2年目に突入したが、コロナ禍ということもあり最初の頃は「やりたいことができない」「こんな大学生活のはずじゃなかった」と愚痴ばかりこぼしていた。しかし、愚痴をこぼしていても時間は止まってくれない。むしろ恐ろしいスピードで進んでいく。それならば、日常の中に転がっている小さなスパイスを拾い集めて、今だからできることをやってみようと思い始めた。明日香村への小旅行もその1つである。「何かのきっかけを見つけてやろう」という思いでキョロキョロしていたから見つけられたものであり、実際に見に行ったからこそ得られた知識である。コロナ禍で外国人と交流する機会がなかったが、偶然目に入ったインターナショナルアワーに参加したからこそ、新しい友人に出会い、英米文学を学ぶモチベーションを得られた。「コロナだから」は何もしない理由にはならない。日常のあちらこちらにスパイスは転がっている。大学生になってすぐの私は、「コロナだから」という理由で目を覆い、転がっていたスパイスに気づくことができていなかった。しかし、その覆いをとってからは、急に視界が明るく開け、「とりあえず思い立ったらやってみよう」という気持ちになった。朝がきて、昼がきて、夜がきて、寝て起きたらまた朝がくるという当たり前の日常のなかに、少しのスパイスを入れてみる。今までの私は、そのスパイスは突然思い立つものが多かったが、今後は今までできなかったことや、やりたいことなど寝かせていたものを、起こしてみようと思っている。

テレビをつければコロナやオリンピックばかりの日常にさよならを告げて、スパイス探しの旅に出てみると、遠くまで行かなくても自分の身の回りに転がっているものである。大切なのは見逃さないように不必要な覆いは脱ぎ捨てることである。見つけたスパイスを手にいろいろなことに挑戦したり、新たなスパイス探しの旅に出たりするのもいい。突然思い立ったら、それは大航海時代の幕開けである。

〔シリーズご寄稿〕

0と1の間から

赤羽　佳奈子
信濃毎日新聞株式会社　諏訪支社
(国文学専修・2017年度卒)

大学時代、世の中にはあまりにもたくさんの本があり、一生かかっても全部読み切れないということに切なさと安堵を覚えたことを思い出す。何もないところから文字を生み出し、言葉が、文章が、1冊の物語になるというのは不思議なものだなと思う。

記者になり、4月で4年目に突入した。大学生で考えるともう最終学年、と考えると、「年を重ねると1年が短くなる」というかつての大人たちの言葉を実感する。

新聞記事は、大事な要素を簡潔に入れることでできていく。取材相手と話をしていると「これを文章にまとめるなんてすごいね」と言っていただくこともあるのだが、実はそんなにすごいことではない。基本的な記事を書く際には、文才はあまり関係ないと思っている。自分の段階で不十分な場合、記事を確認するデスクから問い合わせがあり、要素を足したり、文章を整えてもらったりする。つまり、そこにある事実を書くことで文章ができるのだ。逆に言えば、何もないところから記事を生み出すことはできない。取材をしていると、人の心を動かす作品を生み出す芸術家、美味しい野菜を生み出す農家、楽しい町づくりのアイデアを生み出す人たちなど、0から1を創れる人たちを心底尊敬する。

記者の仕事は、たくさん聞いたこと、見たことを凝縮して伝えることだと感じる場面は多い。取材相手が伝えてほしいことと、読者に伝えたいことが、必ずしも一致するとは限らない。自分が勝手に思いを込めて長く書いても、読者に読んでもらえなければ取材相手の気持ちは伝えられない。短い記事の中でも大事にしたい思いを伝えるにはどうしたら良いのか。簡潔にすれば、繊細な表現の違いで取材相手の思いに反するという事態は避けられるかもしれないが、それでは表面的な記事で終わってしまうのではないか。正解は未だ分からず、葛藤する日々が続いている。

国内で新型コロナウイルスの感染が広がり始めた昨年4月、2年間務めた支社から転勤した。新たな土地ではまた新人の気分。築いてきた取材相手との繋がりがなくなり、初めましての挨拶に行くこともままならない中で、ニュースの見つけ方には苦労した。

しかし、新型コロナの流行により、そこにある事実を伝えること以外に、重要なことに改めて気付いた。気軽に外に出られない状況の中で、何が起きるのか。人が集まれないことで困るのはどんな人か。外ではさまざまなことが中止になる。何もない状況から、想像力を膨らませてニュースを見つけることも、やらなければならない仕事だ。表に出ている不安や不満だけでなく、気付かれない現実を表に出すことに意義がある。新型コロナ下での転勤は、仕事について再考する契機にもなった。

あるガラス職人を取材した際、光を得て色鮮やかに輝く作品を作り上げる姿に感動した。「何もないところから作品を生み出せるなんてすごい」と話すと、「材料があるから0ではないよ」と言われた。農業でも種や土があり、物語を生むにも想を得るための土台がある。いずれも0と1の間に何かがあると考えたら、自分の仕事も0と1の間からならば、何かを生み出すことができるのではないかと思った。

毎日たくさんの人に出会い、話をしていると、当たり前のことながら、世の中には色々な人生を歩んでいる人がいるのだなあと実感する。一見「普通」に暮らしている人でも、掘り下げると素敵な経験の積み重ねが見える。街を歩いている一人一人に物語があるのだと思えば、たくさんの物語が世に出ているのも頷ける。

日々の出会いを通じ、凝縮するだけでなく、生活の一場面から話を広げ、取材相手の意外な一面を引き出すことも記者としての大事な仕事だと感じている。投げかける質問によって表に出てくる内容は全く違うものになる。共通点を見つけたり、遠くの話と結び付けたりすることでいかに話を広げられるか、自分の経験も深めながら考えていきたい。

と、頭で考えるとあれもこれもできるはず、しなければという気持ちになるのだが、いざ朝になると、その日の仕事で精一杯で、思いが遠くに行ってしまうことがしばしば。最近の反省だ。明日やらなければならないことは思い付くのに、今日になるとまた明日に送ってしまう。結局締め切り間際まで手が付かないまま、毎日手帳の片隅に残っていく。昨年は新たな環境を言い訳に、あまり自信が持てる仕事ぶりではなかった。今年は想像力を拡大し、0と1の間から何かを生み出すこと、見つけた1を広げて掘り下げていくことで、自分の仕事に胸を張れるようになりたい。

担当する富士見町にある国史跡「井戸尻遺跡」取材時に。
隣は縄文人(町のキャラクター)

監視の目がきつい生活ほど苦しいものはない
文化大革命時1967年の体験

中野　裕（英米文学専攻・1961年卒）

文化大革命時・1967年の5月から7月末の中国（広州＆北京）での、友好商社の一員としての長期出張生活の思い出です。私にとっては入社後海外への初出張が、この時でした。事前に東京商工会議所にて、中国語の基礎講義を受け、（講師：東大教授・藤堂先生）、日常生活に必要不可欠な会話を取得し、この授業は大変役に立ち、これから、半世紀にわたる中国との取引関係（2年半の駐在を含め）の基礎となりました。

広州中国輸出商品交易会では、それほどでもありませんでしたが、1967年5月20日ら7月31日までの北京の生活は、我々を見守ってくれた中国の関係者の暖かい庇護があったにしても、毎日が息苦しい、つらい生活であったと思い返しています。

宿泊場所の「新僑飯店」（Novotel Beijing Xinqiao）には、我々友好人士を見守ってくれる優秀な服務員が居り、選抜された人たちでしたが、会話は中国語のみであり、私にとっては中国語の良い勉強相手でした。立派な食堂があり、そこでほぼ毎日食事をとるのですが、食事の内容は、ほぼ完ぺきなものでした。食堂の従業員の中にも革命派と反革命派が居り、時には争いがあり、食堂が閉鎖されることもありましたが、その折は、近くの北京飯店へ出かけることにしていました。休日を除く毎日のことですが、朝食をとり、8時に取引先に電話を入れ、こちらの方からアポイントを申し込み、先方の都合が良ければ、会合の時間を決め、出かけることになるのですが、文革の最中であり、先方では、社内での「革命会議」が開かれるなど、革命第一、業務第二が原則で、なかなか会えないことが多く、アポイントが取れない場合は、その日は一日商談なしでした。自分の時間を有効に使うことに苦心しました。

街を歩けば、そこここに壁新聞（大字報）があり、これをじっと見ているだけで、「文革の内容を日本に知らせるあやしい人間」とみなされる恐れがあり、ノンタッチが原則でした。日本の友好商社同志での足の引っ張り合いで、中国側に通報される可能性が大で、うかうか街を歩けない状況でした。

本社との連絡は、通常の連絡はローマ字電報のみで、重要事項は、手紙で送ることになり、歯がゆい日々でした。いつもだれかに見られているとの恐怖心があり、自由な気分にはなれずでした。

街は文革一色に染まり、至るところで「大海航行靠舵手。。。。」（大海を航行するには舵手にたよる、革命は毛沢東思想にたよる、毛沢東思想は沈まぬ太陽だ）の歌が流れていた。ホテルのロビーにあるテレビも革命に関する通達および革命歌が絶えず流れているのが日常でした。週末には、中国の招待先からの招待で、革命京劇の鑑賞会があり、「白毛女」（バレエ）、紅色娘子軍、沙家浜、紅灯記、智取威虎山、が通常の演目であった、殆どが「勧善懲悪をメインとしたもの」、ほかに時たま雑技団の講演があり、大いに楽しめた。これらにより、ストレス解消になったことは事実。

これらの招待がない場合は、自分たちで、観光地（ごく限られた場所が解放されていたのだが）天壇、明の十三陵、頤和園、八達嶺・万里の長城、北京動物園（パンダ鑑賞）、瑠璃廠（骨董市）でストレス解消を図った。（行きたかった北京公園、景山公園は入場禁止。故宮は、中国側の招待でのみOKで自分たちでは入れず）外出は、ホテルに常駐している乗用車で出掛けるが、出発前には、毛沢東語録を共に読んで出かけることになります。運転手側から、第何ページと指定あり、運転手は中国語版、我々は日本語版で同時に読むことになりますが、字数の関係で、どうしても出だしは合っても終わりが合わないことが日常茶飯事の如くおこりました。どんな場合でも、今のマスク持参と同様毛語録持参はマストでした。

これらの運転手は、単なる運転手ではなくて、選抜された政治委員であるとのことです、その所為か、我々から差し出すものは一切受け取らず、観光地訪問時も、ずっと観光地の玄関で立って待っている（SPと同じく、我々に異変がないか見守ってくれている）のが常でした。

もう一つ、ストレス解消は、毎日、本社にその日の業務報告をローマ字電報で知らせるのですが、夜の10時ころに電報大楼（天安門沿いにある大きなビル）に電報を打ちに行くことです。上記のホテルの車を呼び、運転手と毛語録を勉強して、出かけるのが日課でした。夜の街の散策です。

1967年7月になり、本社から帰国命令が出され、招待先の公司の許可も得て、7月末の帰国準備に入るのですが、通過先の香港のビサが必要で、英国大使館が事情あって閉鎖されていたため、英国一等書記官の自宅を訪問し、香港通過ビサをもらい、北京を7月31日に出発し、広州経由、8月1日に香港に出ました。その香港でも、九龍のタクシーの運転手が、革命派と反革命派に分かれており、文革の影響を受けていることを肌で感じたものでした。

絶えず監視されている状況にある生活と、そうでなく、自分のコントロールですべて処理できる環境での生活とでは、大いに違うと感じています。

これからは、ワクチンの接種が順調に進み、コロナの収束を待つことにしたいと念じています。そして、東京オリムピックが予定通り行われ、「世界に誇れる日本」の出現を期待するものです。

（文窓会東京支部長）

文窓会（文学部同窓会）――会計報告――

令和２年度収支計算書（令和２年４月１日～令和３年３月31日）

【収入の部】前年度繰越金		¥19,804,024
今年度収入合計		¥3,979,386
	会費納入金	3,243,000
	協力金	735,000
	受取利息	1,386
収入合計		¥23,783,410

【支出の部】今年度支出合計		¥3,939,914
事業活動費		¥2,092,509
	会報費	1,311,999
	歓送迎会費用	402,890
	文窓賞費	248,960
	ホームページ管理費	2,130
	活動援助費	60,530
	名簿管理費	66,000
協力金費		¥940,268
	学術助成費（文学部）	500,000
	コロナ緊急募金（大学）	300,000
	学友会費	110,000
	学祭援助費	20,000
	渉外費	10,268
事務局費		¥843,172
	事務業務委託報酬	600,000
	家賃・光熱費	105,646
	通信費	130,749
	消耗品費	6,777
支払手数料（振込・振替料金）		¥48,058
旅費交通費		¥15,660
租税公課		¥239
支払利息		¥8
次年度繰越金		¥19,843,496
支出合計		¥23,783,410
（今年度収支）		（＋）¥ 39,472

令和２年度財産目録（令和３年３月31日現在）

Ⅰ．資産の部		¥19,854,380
	（池田泉州銀行）普通預金	111
	（みなと銀行）普通預金	5,205
	現　金	60,743
	（ゆうちょ銀行）普通貯金	453,848
	（みなと銀行）定期預金	1,007,142
	（みなと銀行）定期預金	1,510,051
	（ゆうちょ銀行）振替口座	2,728,528
	（ゆうちょ銀行）定期貯金	6,001,874
	（みなと銀行）定期預金	8,065,878
	未収金	21,000
Ⅱ．負債の部		¥10,884
	未払金	10,884
Ⅲ．正味財産合計		¥19,843,496

事業年度に係る決算報告書を監査した結果、
適正であることを認めます。

令和３年８月10日

会計監査　　花　木　直　彦　　印

文窓会役員（令和元年9月末現在）

会長　武藤 美也子　（43年卒・国文学）

＜その他の役員＞

日高 健一（36年卒・芸術学）　花木 直彦（36年卒・国史学）
三宅 征彦（41年卒・社会学）　田中 賢司（42年卒・社会学）
廣野 幸夫（43年卒・社会学）　吉田 浩次（43年卒・社会学）
西川 京子（44年卒・西洋史学）　田中 睦子（46年卒・芸術学）
坂本 直樹（59年卒・社会学）
津田 薫（平22年卒・フランス文学）
中畑 寛之（平13年院修了・フランス文学）

文窓会ホームページの URL がシンプルになりました！

https://www.bunsokai.com

スマートフォンでも文窓会ホームページへ！

右の QR コードを読み取り、画面に出る指示に沿って操作するだけ。
ホームページの「menu」を押すと目次の一覧が出ます。「アーカイブ」で文窓賞受賞作品が閲覧できます。

スマートフォンはこちら▶▶▶

東京支部便り

2020年度の文窓会東京支部総会及び木曜会は、下記の予定で行う予定でしたが、コロナ禍のため、会場の神大東京六甲クラブが使用できないこともあって、残念ながら、中止となりました。2021年度の開催予定は、別途東京六甲クラブと打ち合わせ決定し、皆様に連絡します。

2020年度支部総会＆木曜会：

○支部総会：2020年10月8日（木）12時より
○木曜会：講師:宮下規久朗先生（神戸大学文学部教授）14時から16時
会　場：神大東京六甲クラブ（日比谷）

コロナ禍のため中止

東京支部連絡先：支部長　中野裕　（なかの　ゆたか）
〒223−0064横浜市港北区下田町1−1−1−113
Tel ＆ Fax：045−561−6317
携帯電話：080−3503−1658
イーメール：y.nakano.1938-panda@d9.dion.ne.jp

振り返れば六甲の山並み～あの頃の友に会いたい

第15回 神戸大学＆文学部ホームカミングデイ2021

── Kobe University Homecoming Day 2021 ──

10/30(土)

※詳しくは 下記のホームページをご覧ください。
第15回 神戸大学 ホームカミングデイ 検索

神戸大学ホームカミングデイ2021

10:30～記念式典／出光佐三記念六甲台講堂
講演：住田功一氏（大阪芸術大学放送学科教授・元NHKエグゼクティブアナウンサー　昭和58年経営学部卒）
（YouTubeによるライブ配信予定）

文学部ホームカミングデイ2021 オンライン開催

今年度の文学部ホームカミングデイは、新型コロナウイルス感染症の感染状況を踏まえ、Web会議システムのZOOMを使用して、オンライン形式で開催します。ZOOM利用のマニュアルをホームページに掲載し、本番前にテストミーティングも実施しますので、ZOOMが初めての方も、ぜひご参加ください。＊詳しい情報は文学部ホームページでご案内しています。

13:00～13:30　受付（ZOOMへのログイン）
13:30～13:50　開会挨拶　文学部長
13:50～15:20　講演／「人文学と病」～病があぶりだすもの
　　パンデミックと分断を描く～
　　濱田麻矢教授（中国・韓国文学）
15:20～15:50　学生によるスピーチ
　　「コロナ禍と留学」河本陽詩　英米文学専修4年
16:00～16:20　第15回文窓賞授賞式
16:20～16:50　文窓会総会

文学部ホームカミングデイ2021 ONLINE

【参加の申込み方法】

① 文学部ホームページの申込みフォームからお申し込みください。
URL：http://www.lit.kobe-u.ac.jp/alumni/hcd2021.html
＊「神戸大学　文学部ホームカミングデイ2021」で検索して、文学部ホームページを開き「申込みフォーム」をクリックしても申し込みできます。

② 大学から郵送で案内が届いた方は、同封の申込み用はがきでの申込みも可能です。
必ずお名前・卒業年・メールアドレス・電話番号を記載して返信してください。
お申込みいただいた方に➡メールでZOOMのURLをお知らせします。

お問い合わせ先	神戸大学大学院 人文学研究科 総務係 〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1－1　TEL 078-803-5591　FAX 078-803-5589 E-mail：lsoumu@lit.kobe-u.ac.jp（@は半角に置き換えてください） ＜平日8:30～17:15／土日祝を除く＞

講演：「人文学と病」　濱田麻矢教授（中国・韓国文学）

講演者プロフィール　京都大学大学院文学研究科出身、博士（文学）。1999年に神戸大学文学部に着任、2018年より教授。中国現代文学を専門とし、性別の表象に関心がある。著書に『ゆれるおっぱい、ふくらむおっぱい』（共著、岩波書店、2018年）、訳書に張愛玲『中国が愛を知ったころ』（岩波書店、2017年）がある。

文窓会ホームページのURLがシンプルになりました！

https://www.bunsokai.com

スマートフォンでも文窓会ホームページへ！

このQRコードを読み取り、画面に出る指示に沿って操作するだけ。トップページ右上の「menu」を押す→一覧→アーカイブから文窓賞作品集が閲覧できます。

神戸オックスフォード日本学プログラム9期生

オンライン修了発表会
8月9日（月）
17:00～（日本時間）
／9:00～（英国時間）
修了式
10日（火）
16:15～（日本時間）
／8:15～（英国時間）
上記の日時に
開催されました。